#吉岡進の新世代沖釣り紀行 vol.20

ツリガチ! TSURI GACHI

東京湾のシーバスジギング

文◎高橋 剛

★シーバスジギングは、ルアーアングラーの癒しだ。これからの時期、水温が下がるとシーバスの群れが固まり、「落として巻いて落とすだけ」の簡単ジギングで釣れてくれる。……はずだったが、ツリガチ取材班が挑んだ12月中旬は、やや時期尚早。だからこそ分かったこともある、実り多き釣行となった。

困ったときの、シーバス頼み。

東京湾における船でのルアーフィッシングの合い言葉だ。

ちょっとでも障害物があれば100パーセントシーバスが着いているのではないかと思える、圧倒的な存在感。

細かいテクニックはともかく、ルアーが動いてさえいれば食ってきてくれるのではないかと思える、陽気なキャラクター。

東京湾には、シーバスがいる。シーバスが、なんとかしてくれる……とは、しかし、ツリガチ取材班は思えなかった。

ツリガチ取材班は、シーバスに痛い目に遭わされている。ビッグベイトを用いる、いわゆるコノシロパターンで、三人のうち二人が1本ずつ。残る一人は、まさかのヨッシー。信じがたい不発だった。

▲当日は片舷に並んでストラクチャー周りを狙った

困ったときに頼れるはずのシーバスも、決してあなどってはいけないのである。

ちなみに、いつも楽しい珍道中になりガチなツリガチ取材班は、船中でのにぎやかさは随一とされている。だが、釣りに関しては当然ながらガチであり、手抜きも甘えも一切ない。それは相手がシーバスでも同じだ。

ヨッシーにいたっては百戦錬磨のプロフェッショナルである。

東京湾のシーバスジギングは落として巻くだけで釣れるはず

ツリガチ!では以前、ビッグベイトでシーバスに挑戦した。25センチ近くあるルアーを投げ、トップウォーターで食いつかせるこの釣りには、一発狙いのギャンブル的要素がある。

一方、今回のシーバスジギングはグッとお気軽だと言われている。

冬を迎え、水温が下がるとベイト（シーバスがエサとするイワシなどの小魚）の群れが固まる。すると、ベイトを狙うシーバスの居場所も固まる。そのシーバスを釣ろうとする釣り人たちの狙いも、定まる。つまり、釣りやすくなる。

しかも、シーバスは落ちてくるものに反応しやすい魚だ。シーバスジギングの基本的な釣り方は、ジグを投入し、着底させ、高速で数メートル巻き上げ、ベイトリールのクラッチをフリーにしてまたジグを着底させる。

簡単に言えば、落として巻いて……の繰り返しだ。通常のジギングのようなロッドアクションは不要で、本当に落として巻いて落とすだけ。だからこそビギナーにもおすすめでき、まさに「困ったときの、シーバス頼み」なのだ。

模様はあまり芳しくなかった。釣行前のつり幸の釣果は、12月17日が0～4本、前日の18日は0～5本。

テクニックの確かさ、アイデアの豊富さは群を抜いている。

それでも、ときにはシーバスでさえ釣果は思うようにならないのだ。だから飽きないし、続ける価値がある。

12月19日、我われツリガチ取材班は、「シーバスあなどれず」を、改めて痛感することになった。東京湾奥川崎のつり幸から挑んだシーバスジギングでの出来事である。

1～2本釣ったらすぐ移動という、厳しい状況になることもあるんだ……。

▶緩急をつけた巻き上げやフォールなど様ざまな釣り方を試すがアタリは遠い
▼ベイトタックルで釣り続けるか、それともスピニングタックルにするか模索するヨッシー

出船前の船長いわく、潮が流れないことと、水温がまだ十分に下がっておらずベイトが固まっていないことが要因のようだ。

「1本取ればいいね。ハッハッハ」という船長の冗談が、まったく冗談に聞こえない。

落として巻いて落とせば釣れるのがシーバスジギングの魅力だが、裏を返せば、落として巻いて落として釣れない場合、やりようがない。

シンプルなだけに、工夫の余地は少なめ。つまりは、シーバス任せという面が大きいのだ。

難しくないがゆえに、難しい。それがシーバスジギングなのだ。そして今回、シーバスジギングのワナにハマったのは、吉岡進その人であった。

6時50分に船着き場を離れ、35分ほどで最初のポイントに到着した。東京湾シーバスジギングの超定番ポイント、東京湾アクアラインの風の塔周辺だ。

「水深27メートル。やってみてください」と船長。すぐに、「ダ～メだ～、コリャ。まるっきり潮が動いてないや」と、真っ正直である。

転々と移動する。これはかなり厳しい戦いになりそうだ……。

移動の最中、ヨッシーが言う。「東京湾ルアー釣り入門に最適なシーバスジギングだけど、7年ぐらい前からちょっとシブくなってきてるんだよね。シーバスが減っているのか、何か大きな変化が起きているのか分からないんだけど……。

それにしても、今はまだ本格的シーズンには早いタイミング。シーバスは元気にあちこち動き回って散らばっている状態だ。

2月中旬ぐらいになってグッと水温が落ちれば、群れが固まってくるよ」

シーバスが散らばっていても、群れが固まっても、釣り方そのものは変わらない。落として、巻いて、落とすだけだ。

「ただ、拾い釣りという感じになるんだよね」とヨッシー。

「この時期は、1～2本釣ったらすぐ移動という、厳しい状況になることもあるんだ……」

最初の1本が呼び水となるシーバスの捕食スイッチとは？

そんなヨッシーの言葉以上にタフなコンディションだった。

釣り開始から28分後に、ヨッシーが「食った」と叫ぶが、すぐに「あれ？」と首をかしげる。

「ん～、バレたかな。いや、付いてるな」と半信半疑でリールを巻く。竿は……曲がっているような、曲がっていないような、微妙な雰囲気だ。

「ジグがエビってるのかもしれないな」と言いつつ、上がってきたのはセイゴ級のかわいいシーバスだった。

その直後、「んっ！」と大きく竿を曲げたのは、タカハシゴーだ。そこそこサイズのシーバスを掛けた。

「……シーバススイッチを入れたのは、おれだからな……」

若干悔しそうなヨッシー。

「シーバススイッチ」。1本がジグに食らいつくと、ほかのシーバスの捕食スイッチがオンになり、群れ全体の活性が爆上がりし、バタバタと釣れる。

▲シーバスの捕食スイッチが入るとこのとおり

今日あえてＰＧを使ってみたことで、ギア比が釣果に影響することがよく分かったよ。

▲スピニングタックルでシーバスジギングをするのは初めてというヨッシー
◀スピニングタックルに交換したのが奏功し、50センチ級のシーバスをキャッチ

▲風の塔で40～50センチ級のシーバスを連発

ヨッシーが釣り、タカハシゴーが釣り、シーバススイッチオンか!? と思われたが、あとが続かない。

ツリガチ取材班の定番キャラクター、イチロウこと鹿島一郎さん、トモキこと板倉友基さんも「うーん……」「これは……」とうなるばかりだ。

それでも船長が「こりゃダ～メだ～」とすぐに見切りを付けてくれるから、釣り人たちはモチベーションを維持できる。

めぼしいポイントをいくつも回ってくれ、「船中だれも釣れずに移動」、さらには「ジグを投入せず移動」ということもしばしばだ。

あちこち移動して再び東京湾アクアラインに戻り、今度は橋脚周りを攻める。シーバスが着いているとしか思えない一級ポイントも、不発……。

「シーバスは間違いなくいると思う。でも、ジグを追ってこない。食いつかない。

こうなると突破口を見つけにくいんだよね、シーバスは。シーバススイッチが入ってくれればいいんだけど……」

ヨッシーですらコレというパターンを見つけられない。

釣り開始から2時間40分ほど経過した10時ごろ、そのときは突然訪れた。

いくつかのポイントを巡ってから再びやってきた風の塔周辺で、シーバススイッチがガチでオンになったのである。

船中のそこかしこで竿が曲がる。バラシも多いが、イチロウ&トモキもついにシーバスをキャッチし、胸をなで下ろす。

ヨッシーもヒットさせるが、キャッチにはいたらない。バラシの多さもシーバスの特徴だ。

「こればっかりは仕方ないんだよね」とヨッシー。それでもスイッチオンでヒットが続けば、かなりの確率でチャンスがやってくる釣りである。

だが、食い始めたときと同じぐらい唐突に、食いが止まった。

「パタリ」という音が聞こえてくるかのようだ。

11時過ぎ、船長は浅場のポイントへと船を走らせた。水深は13メートル前後。ヨッシーはテールスピンジグのバンブルズバイトビーンズTGやメタルバイブのビッグバッカー、さらにはソフトルアーのビッグバッカーソフトバイブも駆使。

スピニングタックルでロングキャストして巻いてくるという、横の釣りでガチ勝負を仕掛ける。

しかし、シーバスからの反応が返ってこない。通常のジギングをしている人には、ポツリポツとヒットがあるのだが……。

ときおり、バタバタッと連発する時合が訪れる。タカハシゴーは巻き上げの途中で、トモキはフォールで着底寸前に食わせることに成功している。

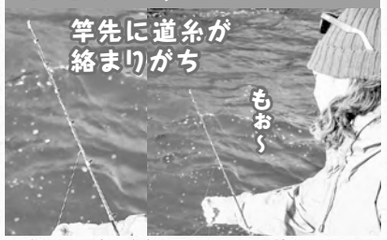
しかし、肝心のヨッシーにナイスヒットが出ない。

「浅場は横の釣りこそチャンスなんだけど……。今日は縦の動きにしか反応しないようだ。不思議なこともあるもんだ……」と、首を傾げるばかりだ。

▲シーバスの活性が上がると、船内ではダブルヒットもしばしば

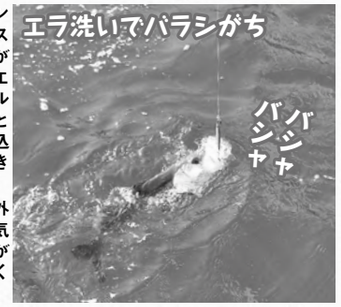
東京湾の シーバスジギングで ○○がちなシーン

当日のルアー船で見付けた



▲移動中にフケた道糸が風にあおられて竿先に絡まってしまうことがある。破損の原因となるので必ず確認しよう

▶40～50センチ級のシーバスは比較的元気がよく、海面でエラ洗いをしてルアーを外そうとするので、取り込むまで油断できない



◀根掛かりが外れたときに不気味な海洋生物が引っ掛かってくる

▶カラーなのか、重さなのか、はたまた形状なのか、色いろ試して「当たりルアー」を探しているとこのとおり

▲軽くキャストしてストラクチャーの際を狙おうとして、直撃させるとエビることが多い。巻くと抵抗が大きいので何か釣れたと勘違いしがち

▼防寒ブーツを新調したタカハシゴー。つまさき部に貼ってあるサイズ表示のシールをはがし忘れてヨッシーにツッコまれるも、このまま釣り続けた

巻き上げ速度が合うかどうか シビアな中で上げた会心の1本

確信を持っていたのは、意外にも永遠の初心者・タカハシゴーだった。

「今日のシーバスはフォールにあまり反応しない。ほとんど巻きで食ってくる」と、彼なりに見抜いていたのだ。

再び風の塔に戻る。水深は27メートルほどあるが、タカハシゴーいわく、底から10メートル以上巻き上げたところでジグにアタックしてくるケースが多いとのこと。

海面直下までジグを追ってくるシーバスまでいる。あちこちで竿が曲がる。時合だ。タカハシゴーが今日イチサイズの52センチを上げる。

そして……。ついにヨッシーが「食った!」と声を上げた。ナイスサイズのシーバスだ。苦戦の果てにようやくたどり着いた、会心の1本となった。

ヨッシーが説明する。

「今日はＳＬＪタックルがどこまで通用するか試そうと思ってね。いつもならベイトリールはハイギアなＨＧを使うんだけど、今日はローギアなＰＧ縛りでトライしてたんだ。

でも、ＰＧではジグの動きが遅くて、見切られていたんだと思う。ＨＧを使っているゴーさんが『巻きに反応する』と言ってたから、ここへきてＨＧのスピニングでジギングしてみた。

そしたら一発（笑）。巻き上げからフォールさせた瞬間にドンとアタったよ。

スピニングでシーバスジギングをやったのは初めてだけど、完全にギア比の合う・合わないが釣果に響いたね……」

沖揚がり間際には、やはりスピニングのシーバスジギングでズドンとビッグサイズを掛けたが、根に潜られて万事休す。

結局ヨッシーは、セイゴ1本とスピニングのシーバスジギングでの1本、計2本だった。

イチロウが8本、トモキが4本、そしてタカハシゴーも8本。今日に限ってはヨッシーだけが外したということになる。

「もっとハイギアなＸＧを使ってみたけど、ダメでした。今日はＨＧの日だったと思います」とイチロウは振り返る。

「確かにシーバスジギングは、ＨＧかＸＧを使うのが一般的。でも今日あえてＰＧを使ってみたことで、ギア比が釣果に影響することがよく分かったよ。

いやあ、シーバス侮れないね。だから面白いんだけどね!」

負け惜しみ……ではないだろう。シーバスジギングは落として巻いて落とすだけのシンプルなゲーム。だからこそ、何かひとつ合わないと、徹底的に合わない……。今回は、それがリールのギア比だった。

難しくないから、難しい。シーバスジギングの奥深い魅力を改めて知ったヨッシーだった。

▲イワシカラーのジグに反応がよかった

▲ＳＬＪ（スーパーライトジギング）タックルでのスリリングなファイトを楽しむ